

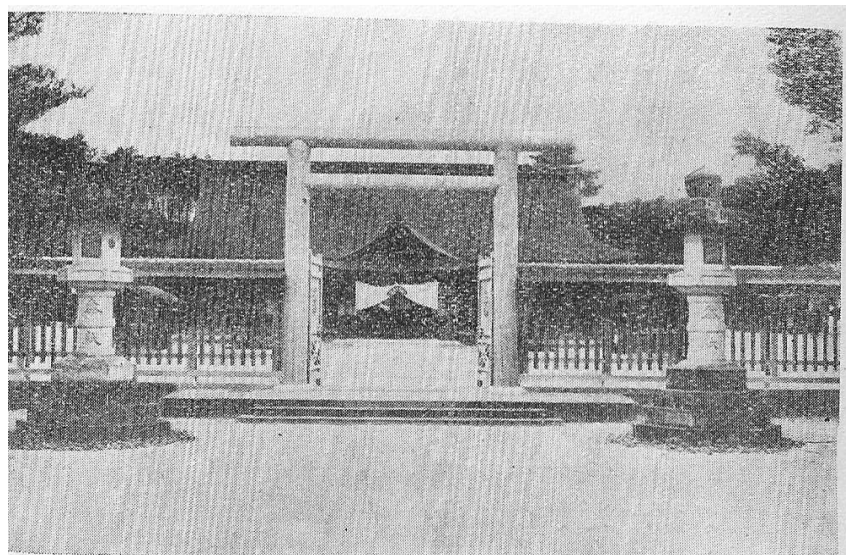
第6話 榎 原 箕 都

かしはら てんと
大和の榎原の地に 都 を奠め、始めて天皇の位に即かれて、
ここに建国の実をお挙げになった。

やまと へいてい
大和地方の平定

ながすねひこ ほろ
長髓彦が滅びた後は、もう大和一带の地には大した悪者もいなかったのも、永い間土賊らのために苦しめられていた良民もすっかり安心して、頭を挙げて、明るく照った日の光を仰ぐように、天皇の御威徳を仰いだ。尤も、少し離れた山の中などになると、まだまだ道理の分らぬ土賊が立て籠って、こそこそと悪事を働いたりしていたが、これらはいづれも烏合の輩であり、天皇ご自身がお出かけになるほどの事も無かったので、部下の将卒を差し向けて、それぞれ討たせになりました。

それで、まもなく、どこもかしこも平定して、到る処に安らぎの聲が満ちました。実に、日向の国を出発以来の長い間のご心労が、ここに始めてお報われになったのであり、天皇のご満足はいかほどであったでしょう。



奈良 榎 原 神 宮

さて、こうして大和地方を
悉く平定したので、神武天皇は、いよいよ東征の目的であった遷都の実を挙げるために、畝傍山のふもとの榎原の地（今の榎原神宮の場所）を選んで、そこを都と奠め、新たに御殿をお造りすることになりました。

その時の勅に、「当に山林を抜き払いて宮室を造り、恭しんで寶位に登り、以って万民を治めることにする。上は則ちここに天つ神の国をお授けになった御徳に答え、下は則ち皇孫の正しき道をお踏みになった御心を弘めようとするのである。そして後に、国内を悉く都として、天下をすべてひとつの家とするようにしたいと思っている」と仰せられた一節がありますが、実に高天原以来の理想をここに実現なさろうというので、何と畏いおぼしめしではありませんか。

そくい
御即位の式

年を越して辛酉の年の正月朔日に、いよいよ御殿が立派に出来上がったので、天皇はここに莊嚴な即位の式を挙げて、人皇第一代神武天皇となられた。

今、その式の次第を言いますと、先づ祭場を設けて天地の神々を祀り、宮門の守護には道臣命と

第6話 榊原 箕 都

おおくめ のみこと ぐんたい ひき あた でんない しゅご うまし ま でのみこと にぎはや ひ のみこと
大久米 命 とがめいめい部下の軍隊を率いて当り、殿内の守護には可美真手 命（饒速日 命 の子）が
ぶ か
その部下の兵士を率いて当りました。

こうして全ての準備が出来ると、あめのとみ のみこと いみべ もつば まつり つかさど やくいん
こうして全ての準備が出来ると、天 富 命 が、齋部という専ら祭の事を掌る役員を率いて、
しゅ じんぎ ささ せい でん あんち たてまつ のりと そう たかみくら あめのたねこ
三種の神器を捧げ持ち正殿に安置して 奉り、進んで祝詞を奏し、天皇が高御座に登らせられると天種子
のみこと だいひょう よごと そう み よ ばんざい しゅく たてまつ
命 がご臣下一同を代表して、壽詞を奏して御代の万歳を祝して 奉りました。

そして後に、四方の門を開いて、広く一般の人々に高御座の尊さを拝観させられた。実にこれが
ちやうてい ぎしき そくいしき なら
朝廷の儀式の始めであり、その後代々の天皇の即位式は皆これに倣っています。

このめでたい儀式のあった年を紀元元年として、わが国の紀年の数え始めとしていますが、神話（日
きげんぜん こだいし せいれき
本書紀）上では紀元前660年であり、最近の古代史では西暦280年ころとされています。なんとわが建国
の遠い昔であることでしょうか。世界に国は多いが、これほど古い国は外には一つも無いのです。の
かつ がいてき しんりやく おか
みならず、建国以来、未だ嘗て一度も外敵の侵略を受けず、もとより一寸の土地を侵されたこともない
いた いわゆる きんおうむけつ ほこ こうえい まこと こ うえ
というに至っては、実に、所謂金甌無欠で、われら日本国民の誇りと光栄とは誠に此の上もありませ
ばんせい いっけい いただ ちゅうじつ ゆうぶ いっちだんけつ
ん。これというのも、上に万世一系の天皇を戴き、下に忠実勇武の国民があつて、常によく一致団結
はたら
して、国家のために働いて来たからであります。

今日、国運はますます隆んとなり、世界で国威はいよいよ輝いて行くにつけても、大昔に、海に、山
しんろう かさ しゅび なか くに へいてい いぎよう あお
に、非常なご心労を重ねられて、首尾よく中つ国をご平定になった神武天皇の偉業を仰がなければなりま
そくい きゅうれき たいいんれき ついたち しんげつ しんれき たいようれき
せん。そこで、そのご即位の日の旧暦（太陰暦）の正月朔日（新月の日）は、今の新暦（太陽暦）
きげんせつ けんこく かみ
では二月十一日に当たりますので、すなわちこの日を紀元節（建国記念日）として、毎年、上は天皇陛下
はじ たてまつ しも つつし いわ
を始め 奉り、下は一億三千万の国民に至るまで、ひとしく謹んで建国のお祝いをするようになってお
ります。

天皇の政治

さてご即位の大典がめでたく終わると、天皇は新たに政治を始めるにあたり、先づ臣下の功績を賞せ
そくい たいてん お あら せいじ はじ しんか こうせき しょう
られました。天皇の臣下のうちには、遠く日向から随って来た者が最も多くいましたが、又、途中で
ひゅうが したが とちゅう
ご高德に懷いて来た者もあれば、大和に来てからご威勢に服して降参して来た者もありました。けれど
こうとく なつ いせい ふく こうさん
も、今になってみますと、いずれも天皇の御為、国家の為に働いた者ばかりなのですから、その間に区別を
ため くべつ
付けずに一様に賞典を賜りました。

先づ天種子 命 と天 富 命 とには最も大事な祭祀の事を司らせて、特に大臣の如き待遇を賜り
あめのたねこ のみこと あめのとみ のみこと だいじ さいし つかさど だいじん たいぐう
ました。当時は祭祀すなわち神を祭る事は、政治すなわち民を治める事と同じであり、所謂祭政一致の
さいし まつ おさ いわゆる さいせい いっち
時代でしたから、この二人の功臣は、すなわち最高の文官に任ぜられたわけです。

祭政一致

さいせい いっち い み くわ だいひょうしや せんぞ まつ さいこう
祭政一致の意味を詳しく言います、天皇は皇室の代表者ですから、ご先祖の神々を祭る最高の方で
しはいしや てんち まつ たま めい
あると同時に、また、国家全体の支配者でもありますから、臣下を率いて天地の神々を祭り給い、その命を

第6話 樞 原 箕 都

受けて人々を治め給うのです。すなわち神々を祭ることが政治の根本であり、政治をまつりごとと言うのも基本はここに在ります。

さて、この二人の文官の次には、常に皇軍の先頭に立って、各地の戦いに最も名誉の武勲を現わした道臣 命 と大久米 命 とに広大な土地を賜い、めいめいのその部下の軍隊を率いて朝廷のご守護に当らせた。新たに帰服した饒速日 命 の子の可美真手 命 には、主として御殿のうちの警護に当らせられました。前に敵でありました者の子をば高い地位に用いられたのを見ても、いかに天皇が度量の大きな方であったかが分ります。

又、地方には国造、県主などの役を置いて治めさせましたが、中でも、天皇のお船をお迎えしてから、常に忠実にお仕えして来た棹根津彦には、特にお膝元の大和の国造の任をお授けになったり、帰順した弟 獯には猛田の県主の任を、同じく弟磯城には磯城の県主の任をお授けになるというように、凡そ功のあった者は、末々の一兵卒に至るまで、それぞれ公平にその功を賞せられて、その者に適して職務をお授けになったので、誰も彼も今更のように天皇のご恩に感じて、いよいよ忠義を尽くそうという気になりました。

こうして、久しく悪者どもが跋扈して乱れていました中つ国が、ここに全く統一して、一般の人々も安心して日を送れるようになりましたのは、丁度久しく暗闇であった夜が明けて明るい太陽の光を仰いだのと同じでしたから、人々は喜んで、天皇を「初国治らす すめら尊」とお褒め申し上げました。

祖先の神々を祭る

けれども、天皇はこの偉業を自分の手柄のようになさらずに、ある日、ご臣下に仰せられた。「わが祖先の神々が上天にましまして、常にわが身を守り、わが事業をお助け下されたのである。今すべての悪者どもが平らいで、中つ国が一体に治まったのは、全く神々のご加護のおかげである。就ては、先ず天つ神の御霊を祀って、お礼を申そうと思う」と、そして祭場を鳥見という山に建てて天つ神をお祀りになりました。

これは、言うまでもなく天皇のご孝心から出た事なのですが、また、このご祖先を崇められるということは、既に高天原で天照大神がご先祖に新穀を供え、神衣を供えさせられたこともあって、謂わば、大昔からわが皇室のご美風のひとつなのであります。

わが国民が神を敬い、祖先を尊び、長上に仕えて常に真心を尽くすのも、皆この皇室の尊いご美風をお手本に仰いで来たからでして、そのもと作りは実に遠い昔のことです。

天皇の御代はその後幾十年も太平が続いて、わが国の基礎はいよいよ固くなりました。天皇はご即位後38年目にご寿命が終わりまして、その三月十一日に遂にお崩れになりました。この日を太陽暦に直すと、4月3日に当たりますので、この日を神武天皇祭として天皇の御霊を祭り、その偉業を追想し奉っております。

(第6話 樞 原 箕 都 終わり。 次は前頁に戻り、 第7話 伊勢の神宮 へ)